

“日本的”人間関係と日本人の コミュニケーション再考

市川 孝 一

本稿は、いわゆる日本の人間関係と呼ばれてきたもののいくつかの側面を整理しなおし、あわせて“日本的”コミュニケーションとのかかわりを検討しようという試みである。

一 “日本的”人間関係

日本の人間関係とは何かという正面切った議論は、もとより筆者の能力を越えているし、本小論の目的でもない。ここで問題とするのは、いわゆる日本の人間関係のことで、従来多くの日本人論・日本文化論の中で、特殊日本的な人間関係として繰り返し論じられてきたもののいくつかの側面を取り上げ、コメントを加えることにその目的を限定したい。何故なら、こうしたテーマは、かなり“評論的”な議論を含む散発的な形で言及されて来た場合が多く、それらの中から問題点を拾い上げ、整理しなおすことが、少なくとも今の段階では、一つの方法になり得ると考えるからである。

具体的には、本稿においては、日本の人間関係の中核をなす

ものとされてきた諸側面を象徴的にあらわしていることばを手がかりとして検討の作業を進めたい。

そのうち今回は、ひとまず次の五項目を選ぶことにした。つまり(一)「タテ」「ヨコ」(二)エン(縁)(三)パツ(閥)(四)親分(子分)(五)「ウチ」「ヨソ」といったものがそれである。

(一)「タテ」関係—「ヨコ」関係

“日本的”人間関係といえば、「タテ社会」云々というのが、最も単純な連想であるほどにポピュラーなものとなっている中根(1966)の著作で提示されたのが、この「タテ」関係性に関する議論である。

その主張を簡単に要約すると、次のようになる。つまり、社会集団構成の原理には、大きくわけて二つのものがある。一つは、資格によるもの。もう一つは、場によるものである。「資格による」とは、社会的個人の一定の質を基準として集団が構成される場合であり、「場による」とは、資格を問わぬ一定の枠によって集団が構成される場合をいう。そして、この後者、すなわち「場による」集団構成原理——「枠設定による集団構成」「枠による機能集団構成原理」——が日本社会の基本的な原理であるという主張である。

そして、これを人間関係という観点から見た場合、その結びつき方の形式は、理論的に「タテ」と「ヨコ」の関係という二つに分けられるのだが、前記の集団構成原理を基礎とした場合には、理論的にも必然的に「タテ」関係が導かれるというのである。

こうして、日本人の人間関係の基本的特質として、その「タテ」関係性がクローズアップされ、逆に「ヨコ」関係の不在が指摘される。例えば、企業別組合が、その典型であるように、同じ資格を持ったものが一定の枠を越えて連帯することは困難であり、「同期の会」的な「ヨコ」のつながりも、先輩・後輩の序列を一層はっきりさせ、序列意識を強化するものでしかないとみられる。

しかし、こうした今日の具体例をひとまずおいて、もう少し原理的に考えた場合でも、「士農工商」に典型的にあらわれているように、一方でカースト的な「ヨコ」の関係を、他方で、主従関係に象徴される上下・「タテ」の関係を巧みに組み合わせてきたのが、伝統的な日本社会の支配原理であったように思われる。

だから、日本の人間関係という問題を考える場合、この「タテ」と「ヨコ」の糸が織りなす複雑な模様を明らかにするという困難な課題を我々は課せられることになる。

(一) エン(縁)

人と人との結びつきをいうのにエン(縁)ということばがあるが、ここに含まれる包括的意味を全部含み得る対応語を外国語の中に見い出すのは困難だといふ。

このエンということばには、大きくわけても二つの異なった性質のものが含まれているように思われる。一つは、「これも何かの縁でしょう」「これは奇しき縁で」さらには、「袖すり合うも他生の縁」といった類のものと、もう一つは、血縁・地

縁という社会学的概念としても通用し得るものである。

前者は、人と人との結びつき、人と人との出会いのうちに何か運命的なものを見ようとする発想で、仏縁とか因縁とかいうことばに象徴されるように、仏教的なものの影響が明らかかなように思える。日本人の心的態度・意識の問題を解くカギとして興味深い。後者は、人間の結びつき方・人と人との接触の形態という原理的な分類に対応している。母子関係を通じて、また一定のスペースを共有する群居的動物として、人間は、まず血縁・地縁という絆からは逃れられない存在としてある。

さらに、この二つを囲んで、これとは異なった原理が存在する。これは、米山などのグループが、職縁とか、社縁とか呼ぶものである。これに関しては、同じ米山(1971)の「ナカマ」についての議論に詳しい。ここで、彼は、社縁で結びつく集団のアソシエーション的な側面を強調しているが、これらの集団にも機能集団としての結びつきの自由さがないように思われる。確かに地域共同体としての古い意味での地縁性は薄れたかもしれないが、そこで失われたものが、そのままこれらの社縁集団の中に入り込んでしまっているところが、「日本的」集団の特徴ではないかと思われる。それらを、まさに社縁ということばで呼べるところが、何よりも、それらの集団のうちにエモーションナルなものが持ち込まれていることの証拠ではなからうか。

(二) バツ(閥)

閥という人間集団も「日本的」な人間のつながりのあり方と

してしばしば論じられてきた。もちろん、古今東西、集団のあるところ、組織のあるところ派閥のないところはないという考えもできる。問題は、何によって派閥が形成されるかという派閥形成の原理で、それが、ある社会の集団や組織のあり方の特徴を明らかにすることになるだろう。

こういう観点から、日本社会の閥を考えると、圧倒的ウエイトを占めるものの一つが、まさに前項でふれた血縁・地縁というエモーショナルな紐帯を契機としたものであることがわかる。(明治政府の露骨なまでの郷党閥(藩閥)、一族支配の会社組織等)もう一つは、次の項目と重なるのだが、親分・子分的派閥である。これは、政界の派閥に典型的に見られるもので、それらが何々派と、その名まえに個人名を冠していることがいかにも象徴的である。本来は、理念や主義主張の違いによって形成されたはずの組織(党)の中に、このような集団が分立することは、それ自体が一つの皮肉なのだが、何よりも日本の政治文化の一面を雄弁に語っている。

もっとも、中根(1967)によれば、「タテ」集団においては、そのリーダーと成員との結びつき方の特性から、常に党中央の形成と分裂の危機をはらんでおり、派閥生成は、その必然的帰結であるということにもなる。

四 親分・子分関係

すでに一部前項でふれたが、これに関しては、いわゆる日本社会の家族主義的性格との関連で問題にされる場合が普通である。川島(1960)の議論が、その代表であるが、その主張のエ

ッセンスは、家族制度の生活原理が、家族内部にとどまらず、その外部にまでも拡大されているということにある。「家族的」人的結合原理が、家族外集団においても貫徹されるため、第二の親子関係たる親分・子分関係は必然の産物であり、さらに、諸々の擬制的親子関係が、あらゆる集団の中に、庇護・奉公関係という形で浸透しているというのである。農村における、地主・小作関係は、この典型であったし、過去の農村に限らず、中小企業における雇主と雇人との関係、大企業においてさえ、その人間関係の中に、あるいは、官僚組織や、前にふれた政党内の派閥関係の中に、また「企業一家」的な考えに、未だ根強く残っているのである。

(四) 「ウチ」「ヨソ」の区別

場によって形成された粹集団には、絶えず粹を強化しようとする力が加えられる。それは、粹内の成員に一体感を持たせ、集団・組織との一体感を強める努力となってあらわれる。「われわれ」意識を強調し、外部の類似の集団に対する対抗意識さらには敵対意識をあり、情緒的なものに訴えて、ナカマ意識やミウチ意識、組織・集団への帰属意識を高揚させるのである。成員の全面的・全人格的参加が求められ、閉鎖的で堅固な集団形成が目ざされる。(『丸抱え』の日本の労務管理)またこうして形成された集団には、一定の「文化」が成立し、今度は逆に、それが一体感、集団化を促進する。―このプロセスを経て、集団の孤立性・閉鎖性は、ますます強化され、「ウチの者」「ヨソ者」の差別意識が生じるのである。

中根は、主にこれを、場による集団形成のもたらす必然的結果として、原理的に説明したが、歴史的にみるなら、その基礎は、やはり、村落共同体的・ムラの集団の伝統のうちににあると思われる。

二 日本人のコミュニケーション

以上のように、『日本的』人間関係の諸側面をひとまずおさえておいた上で、日本人のコミュニケーション⁽⁸⁾という問題を考えてみたい。といっても、これも、あまりにも漠然としており、大きすぎる問題である。ここで焦点となるのは、佐藤(1965)が、コミュニケーション社会学の課題の一つとしてあげているコミュニケーションの文化型の問題である。

しかし、こうしたテーマに限定したところで、同じ佐藤(1972)がいうように、未だ体系的・総合的な研究があるわけではない。

従って、ここでも先の人間関係の場合と同様に、いわゆる日本人の国民性論・精神構造論といった形で断片的に語られているものを手がかりにしなければならない。

以上のような観点から、日本人のコミュニケーションを考えた場合、その特質として、次のようなものがあげられると思う。(一)非言語的コミュニケーションの相対的優位(二)以心伝心型コミュニケーション(三)不自由で固定化したコミュニケーション

(一) 非言語的コミュニケーションの相対的優位

世良(1963)は、演劇論を手がかりにして、日本人のコミュニ

ケーションの性格が多分に非言語的側面に力点を置いたものだという指摘を行う。つまり、一方の極に新劇(「すべてをセリフによって表現し、身体的行動が、そのセリフの説明、補足、要約であるようなドラマ」)他方の極にメロドラマ(「すべてを身体的行動によって表現し、セリフがその行動の説明、補足、要約であるようなドラマ」)という劇の二分法に従うなら、日本人のコミュニケーションの性格は、『多分にメロドラマ的』だという。また、日本人のラプシーンを戯曲に書くと、言語的側面は「……」の連続でト書きばかりになるという例も引き、日本人のコミュニケーションにおける言語的側面の空白化傾向に注目し、特にこれが自己を語る場合に顕著であることを指摘した。世良は、これを『自己否定性』に結びつけるのだが、ここでは、むしろこの縮少「空白化」傾向が、言語的側面のみならず非言語的側面にもみられるという点に注目しておきたい。多田(1972)の『しくさ』についての議論は、まさにこの点にふれたものである。また、これは同時に、感情表現・自己表現の問題でもあるわけだが、全体的に抑制的なトーンにおおわれている感情表現は、前節で問題としたような人間関係のうちで、はぐくまれてきた日本人の『習性』だといえる。

(二) 以心伝心型コミュニケーション

加藤(1961a)は、日米のコミュニケーションの哲学ともいふべきものを次のように対比させている。つまり、アメリカのコミュニケーションにおける原則は「話さなければわからない」「話せばわかる」であるのに対し、日本のそれは「話さな

くてもわかる」「話してもわからない」だという。カクテル・パーティー、茶の湯がそれぞれの象徴であり、これはまた、人格の部分的理解と完全な全人格的理解という両者の間の「わかり合う」型の違いにも対応している。

そして、こうした原則から導かれる日本人のコミュニケーションの特徴、即ち「コトバを使うことじしんを拒否した沈黙の美学。言わず語らずの世界に意味をあたえそこから意味を吸収する方法。コトバを媒介としない直観的認識力」は、「察する」とか、「以心伝心」とかいうことばであらわされる「日本的」コミュニケーションの特質に他ならない。

また加藤周一(1972)の、日本社会の著しい特徴の一つとしての小集団の成員相互間のコミュニケーション——「内コミ」(intra-group communication)の円滑さと小集団相互のコミュニケーション——「外コミ」(inter-group communication)の困難さの指摘も、この側面にふれたものである。

そして、これは前節での「ウチ」「ヨソ」の議論に結びつく。ウチワ、ミウチ、ナカマという閉鎖的・排他的集団内部での意志疎通は、スムーズなのに対し、集団外部とのコミュニケーションは著しく阻害されている。

コミュニケーションを通じて、新たな人間関係をつくりあげていくことが、我々は、おそろしく不得手のように思われる。

「話さなければわからない」状況にあって沈黙がちであり、「話さなくてもわかる」集団の中で、かえって饒舌なのである。

(三) 不自由で固定化したコミュニケーション

人間関係とコミュニケーション関係との間に密接な相互関係があるのは、当然のことだが、日本人のコミュニケーションを考える場合、前者が後者を規定する度合が相対的に高いように思われる。さらにいうなら、固定化した人間関係にコミュニケーション関係が従属しているのではないかということである。

この状況は、例えば、敬語の問題に明らかで、自分と相手との関係が明確にならないとコミュニケーションが成り立ち得ない。これは、また先にふれた「タテ」関係の必然的産物でもあり、それに伴う強烈な序列意識を考慮に入れなければ、しゃべることも、日常的な行動さえできない。(上座・下座の別等)

さらに複雑な人間関係が固定化し、儀礼化すればするほど、それに従属したコミュニケーションは、意味のないことばの交換という形骸化したコミュニケーションに墮するだろう。ここに、ことばに対する不信心は不可避である。それ故、今日の意味でのことばに対する不信心とは多少異質の、ことばに対する不信心は、日本人の間には、かなり根強く伝統的に存在してきたように思える。

例えば、これは、「タテマエ」と「ホンネ」の使い分けという問題と無縁ではなく、「察する」ということも裏返せば、こうした「タテマエ」のことばの裏に隠された「ホンネ」をさぐる——「かんぐる」「ハラのうちを読む」という否定的な側面も含み得るものである。また「同感」や「想像力」も、ややもすると小心に他人の顔をうかがういじましい生活技術と化す危険を含んでいる。日本的コミュニケーションの特質をさ

ぐることにともに、その肯定的・否定的側面を選び分ける作業も決して容易ではない。

(1) 今回取り上げるものは、人間関係にまつわる「ナマ」のことばというよりも、一旦論者の検討のプロセスを経て提示されたものを中心である。これとは別に、人間関係にまつわる慣用語や独得の言いまわしを手がかりにして、日本の人間関係の特質にせまることが可能ではないかと考えている。極めてラフな形ではあるが、筆者は、「記者席」(朝日)「政界メモ」(読売)等のコラムの内容分析を試みたことがあるが、そこには、カオ(カオを立てる、カオをつぶす)スジを通す、ナレアイ、ネマワシ、ミズに流す等のことばが多く見られる。これらのより精密な分析により、日本の政治風土、政治文化の特質とともに、日本の人間関係のある側面を鮮明に浮き上がらせることができるのではないかと思う。何故なら、政治の世界には、純粹培養的に、ある種の人間関係が温存されているからである。

(2) この他にも多くの検討すべき事項は残っており、選択の恣意性が問題とされるかもしれない。例えば、義理・恩に関するものの脱落等。しかし、このテーマについては、各論として詳細な検討がなされてきている。(今までの議論のまとめとしては、安田(1974)が有益である。)ここでは、いわば総論のレベルで、特に集団構成の原理という問題に比較的関係の深いものを選んだ。

(3) 藤岡(1974)における米山俊直氏の発言を参照。

(4) 藤岡(1974) p. 7 及び加藤(1966) p. 17
(5) ひいては、これが、日本文化を家族主義的側面からとらえる伝統に対する批判となり得るといふ見解には注目すべきである。

(6) ここでのコミュニケーションは、『意志伝達のメカニズム』程度のルースな規定である。

(7) 前者が花田清輝、後者が木下順二のもの。

(8) 加藤(1961a) p. 40

〈引用及び主要参考文献〉

- 荒木博之(1973)『日本人の行動様式』講談社
Barland, D. C. (1973) *Public and Private Self in Japan and the United States* (西山千訳 (1973)『日本人の表現構造』サイマル出版)
藤岡喜愛編(1974)『続・人間を考える』II 社会思想社
Hall, E. T. (1959) *The Silent Language* (国弘他訳 (1966)『沈黙のことは』南雲堂)
板坂 元(1971)『日本人の論理構造』講談社
加藤秀俊(1961a)「われわれはなぜ話さないか」『言語生活』十一月 筑摩書房
(1961b)「非言語的コミュニケーションの問題」『思想』十一月号 岩波書店
(1966)「ロマンティズムとつきあふ」『ロマンティズム』No. 8 地域社会研究所

- (1973) 「日本文化とコミュニケーション」講座『現代の社会とコミュニケーション』5 『情報と生活』所収
- 加藤周一 (1972) 「内コミと外コミの問題」『世界』一月号 岩波書店
- 川島武宜 (1950) 『日本社会の家族的構成』日本評論社
- 丸山真男 (1961) 『日本の思想』岩波書店
- 南 博 (1953) 『日本人の心理』岩波書店
- (1957) 『体系社会心理学』光文社
- 中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係』講談社
- 佐藤 毅 (1963) 「コミュニケーション社会学の問題」『現代コミュニケーション講座』IV 『コミュニケーションの社会学』有斐閣所収
- (1972) 「日本人のコミュニケーション」『社会学セミナー4 社会心理・マスコミュニケーション』有斐閣所収
- 佐藤忠男 (1958) 『裸の日本人』光文社
- 世良正利 (1962) 「日本人におけるコミュニケーションの問題」『年報社会心理学3』勁草書房
- (1963) 『日本人のパーソナリティ』紀伊国屋書店
- 多田道太郎 (1973) 『しぐさの日本文化』筑摩書房
- 辻村 明 (1968) 『日本文化とコミュニケーション』NHK ブックス
- 安田三郎 (1974) 「義理について——日本社会ノート(1)」『現代社会学』Vol.1, 2 講談社
- 米山俊直 (1971) 「日本の社会関係における〈基本的概念群〉」『季刊人類学』2—3 社会思想社
- (1974) 大学院博士課程